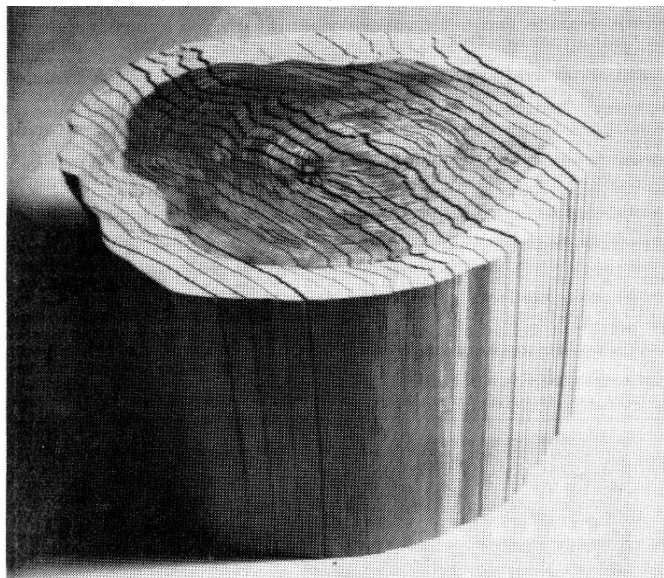


ドルドレヒトの東西フォーラム: 日本語でスペースを埋める

文：ウォルター・バーテン

列車が橋を割る直前に、川の向こう側にあるドルドレヒトの旧市街が、まるで絵本のページをめくっているように見えます。家々は水に浮かんでいるように見えますが、鈍い塔のある頑丈な教会は動かさません。その後、まるで解放された直後に時計が爆撃された郊外の景色に戻されたかのように、裸の工業団地が通り過ぎ、ショックで列車は駅に止まります。旅行の目的は記載されています強風で旗がはためくことを除けば、どんな畑や道でも同じようなものではありません。

「ドルドレヒトの旧市街中心部の端にある空き地で、6人の日本人と6人のオランダ人彫刻家が、6月1日から7月15日まで、東西フォーラムの名前でオランダフェスティバルの中で協力します。このコラボレーションは、機械とバスケット工場を収容するために使用されていたサイトのビジュアルコンセプトにつながるはずで、す。参加アーティストは、日本からは菅原次郎、片桐浩典、長瀬雅之、田辺武、岡本、三上博、ヘップ・ド・ムーア、レックス・ウェッゲラー、ロバート・オブライエン/アイリーン・ドルグリーバー・フォーチュイン、エヴェルト・ヒルゲマン、ディック・ポステマ、マリナス・ボエゼム。



KAZUO KADONAGA: Wood no 11 K (1980)

ドルドレヒト文化評議会の情報ステンスルについては以上です。彫刻家フォーラムまたはシンポジウムは、アーティスト自身、この場合はオランダの彫刻家サークルによって組織され、短時間で結果をもたらすはずのコラボレーションに到達することを意図しています。このような会議は5年前に Gorinchem で開催され、材料、技術、人材を供給していた地元産業の支援のおかげで、エキサイティングなイベントになりました。民間企業と公共事業もドルドレヒトのアーティストを支援します。



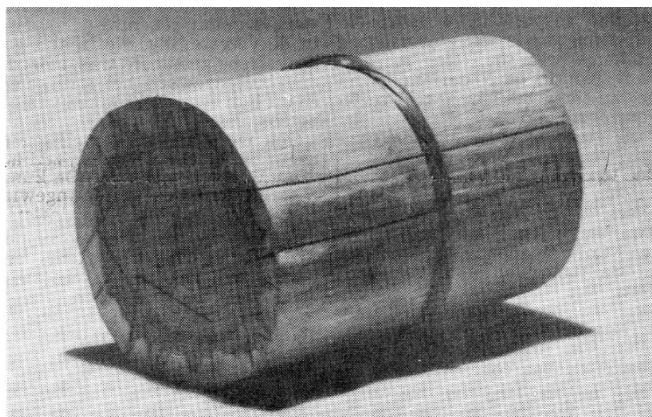
妻兼治郎 : MU-765 (ブロンズ、1976)

日本人のほとんどは長年ヨーロッパに住んでおり、さまざまなシンポジウムに参加しています。長瀬雅之(1949 年生まれ)は石で働き、初歩的な正式な言語を用いて自然のエネルギーと葛藤を目に見えるようにします。(仮)カタログに掲載されている菅原二郎(1941 年生まれ)の作品は、カール・アンドレとミニマルアートの関係を示唆している。岡本淳夫(1938 年生まれ)は、空間、時間、物体の相対的な関係に基づいて、新しい世界秩序を模索していると説明しています。三上宏(1944 年生まれ)は、人間の行動と地域の環境が相互に影響を与えるというコンセプトに基づいて、「貧しい」素材でシンプルな看板をデザインしている片桐浩典の彫刻(1956 年生まれ)は、原始的な構成主義として説明できる厚い &

nconvene 出口。えーに変わります。

田辺武は、「オブジェトルーヴ」を用いて自然界の元素の力を象徴しています。Marinus Boezem(1934 年生まれ)と Lex Wechgelaar(1936 年生まれ)は、1960 年代後半の革新的な発展の特徴的な代表であり、異例の素材や概念的な原理が重要な役割を果たしています。エウエルトヒルゲマン(1938 年生まれ)は、体系的な構造研究に従事しています。ヘッペデムーア(1938 年生まれ)とディックポステマ(1952 年生まれ)は、地元で発見され、アルテポヴェラやランドアートなどの動きに影響を受けている素材を使用しています。デュオロバート M.オブライエン(1951 年生まれ)とアイリーンドルグリーバーフォーチュイン(1959 年生まれ)は次のように説明しています:「フォーム、マテリアル、テクニクの本当の意味は、それらに適用された解釈とマテリアルとテクニクの本当の形二度と見られない」。コラボレーションは、共通の出発点が多かれ少なかれ策定され、個々のデザインが現在開発されている段階に達しています。

ドルドレヒト博物館、ドルドレヒトの Museumstraat 40、かぎ針編みの代わり。何世代にもわたって、禅宗に属していた彼の家族は、寺院のために宗教的な物を作りました。アズマは 1959 年からミリアンで暮らし、働いて



KAZUO KADONAGA: Wood no 11 M (1981)

いました。展示された画像は、過去 10 年間に作成されました。それらは抽象的なオブジェクトであり、形状は単純ですが、不規則なため、直感的な開発プロセス。長方形のサーフェスは、ソフトカーブによってバランスがとられています。滑らかな表面には、酸の影響を受けたかのように穴が開いています。テーブル、神殿の形、円錐、円柱、楕円形の穴など、2 つまたは 3 つの隣り合った繰り返しの標識は、儀式的の習慣を示唆しています。

禅仏教に慣れていない人にとっても、この芸術は美的品質を超えた内向的な緊張を醸し出しています。

角永和夫は現在も日本に住んでおり、寺院建築や祭壇の木工に精通しています。ウッドは彼にとって神聖な価値を保持しています。彼は、分割されて元に戻された木製のブロックと木の幹の断片を展示しています。分割と反りは、木材が生きている材料であることを明らかにします。自然のプロセスを尊重することにより、各アートオブジェクトには信頼が与えられます

深刻な意味。

ドルドレヒトは東西フォーラムに完全に魅了され、日本人の 2 人の彫刻家、吾妻兼治郎と角永和夫(7 月 18 日まで)が展示されます。今世紀初頭、日本人アーティストはパリに移り、現代美術の創設者から彫刻を学びました。帰国後、彼らは美術教育に携わり、日本のアカデミーは何世代にもわたってロダン、マイロル、ブールデル、デスピオのエピゴンを生み出してきました。

第二次世界大戦後、日本の彫刻家はすぐに自分たちの意見で国際運動に関与するようになりました。これには、movementero 運動の一部である Gutai グループの場合も含まれます。国際化に関わらず、ドルドレヒト美術館での展覧会に示されているように、日本の文化に独自の文化が残されています。

東ケンギロ(1926 年生まれ)は、日本の青銅鑄造所から来ました。Galerie 56-58、Nieuwstraat 58 はさらに 5 人の日本人アーティストを展示し、Pic tura Drawing Society の部屋である Voorstraat 190-192 には、日本のインスタレーションとパフォーマンスのプログラムが設置されています。。

駅に戻る途中、東西フォーラムを通り過ぎました。矢印は、ビクトリアスケットとビスケットの工場の廃墟を上向きに指し示していました。二サードが取り除かれた 1 階では、人々のグループがテーブルの上で立って立っていた。彼らの焦点は、日本人の少年が奇妙な構造をモデル化した泥だらけの風景でしたが、静かな口調で仲間の同国人は、英語でテキストと説明を提供しました。スケッチの入った紙のシートが壁の後ろにあり、風の帆のようにガラガラと音を立てていました。一ストウエストフォーラムの発展について詳しく知りたい方は、毎日ビスケット工場を訪れることができます。

喫煙、安全に行き詰まった